目加田誠著

新釈 詩経

岩波新書

155

目加田　誠

1904年山口県に生まれる
1929年東京大学文学部卒業
専攻—中国文学
現在—九州大学名誉教授，早稲田大学文学部教授
著書—「屈原」(岩波新書)「詩経」「風雅集」「唐詩選」「杜甫」「洛神の賦」

新釈詩経　　岩波新書(青版) 155

昭和29年1月25日　第1刷発行
昭和49年5月20日　第20刷発行

著者　目加田　誠

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行者　岩波雄二郎

東京都板橋区板橋 4-47-7
印刷者　山田　博

発行所　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　三陽社印刷・永井製本

目加田誠著

新釈 詩経

岩波新書

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

序說……五
國風……一三
小雅……一一五
大雅……一七一
頌……二〇九
後記……二二九
あとがき……二三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

序説

『詩經』は中國最古の詩集である。西暦紀元前十二世紀頃から、中國では周という王朝が中原を支配していたが、西紀前七七〇年の頃、打ちつづく失政と外敵の侵入とによって一旦國を滅し、それまでの都であった鎬京（陝西省長安縣西南）から、改めて洛邑（河南省洛陽縣）に遷った。これ以後を東周といい、まもなくいわゆる春秋時代に入り、周の朝廷の權威はもはや一諸侯並に失墜した。この周朝の初期から、東周に遷って百數十年あまり後まで、およそ前後數百年間の、上は朝廷の祭祀（まつり）や饗宴（うたげ）に奏せられた樂歌、下は各地方の民間に唱われた歌謠など、合せて三百五篇を收めたのが『詩經』である。中でも周室東遷前後のものが多いように思われる。いいかえればおよそ二千七百年昔、周室東遷前後のものを主として、古いものは今から約三千年以前にも遡ろうという中國古代の歌を集めたものなのである。ただしそのいちいちの詩の製作年代は、ごく少數のものを除いては古來多くの學者の推定にもかかわらず確實なところは分ら

ない。大體民謠のようなものは、いつ誰が作ったともなく、だんだんにひろまって、幾世紀間にもわたって、多少變化しつつうたい傳えられるのが常であるから。

それほど古い昔の歌を集めた『詩經』が、なぜ今日のわれわれに、このようにじかに心に觸れるものを持つのであろうか。それは素朴なるものへの鄕愁であろうか。それとも溫柔敦厚は詩の敎なりといわれる、情意の美しい調和による古代の詩の典雅さに心ひかれるのであろうか。そのいずれをも認めうることながら、さらに大切なことは、これら古代の詩は、後世中國の詩人の詩のような、高い敎養をもつ人々のみによる消閑のわざではなく、まったく古代の人々の現實の生活に卽した、人生に切實なる聲であったということである。

『詩經』の詩には、或は集團的に歌唱された勞働歌、或は朝廷に諸侯が集っての宴席に奏した歌、或は一族の繁榮を祝禱する歌、或は周の父老が時の爲政者を諷刺する歌、或は神明に奏して子孫のまごころを通ずる祭祀の歌などがその多くの部分を占める。およそ古は歌というものに特別な力を感じていたのではないかと思う。人をも神をも動かすという、これが歌の德である。各國の民謠を『詩經』では國風といっているのだが、なぜ風というのだろう。およそ風は目には見えぬ。ただそのただよいゆく聲に知る。八方の風氣が音律に現れるものを八音という。古は盲目の音樂師が、音樂を聞いて八方の風氣を察したといわれる。詩の國風もやはり各國の音の意味であろう。風は漂うて行って物を搖がす。そのように歌の聲は漂うて行って、人

の心をゆり動かす。歌をうたって相手の心を誘い動かすのは古の戀人たちの習わしであった。諷という字の意味も、もともと歌にうたって相手の心に訴えるのだ。歌によって相手の罪をあらわし、その反省を求める。『詩經』に數多くある諷諭の歌は、誰かが民衆の聲を代表して、歌にうたって爲政者を諷し、その歌の力をもって、時の人のよこしまな心を動かし、ふたたび正しい世に戻して、市民を養わんことを切望した、痛切懸命な歌である。歌こそこうした力のあるもの、それは人の心のみならず、神の心をも動かして、その詩のことばを實現させる。この點、『詩經』の中の一族の繁榮を祝福する歌とか、或は新室落成のことほぎの歌などに、あきらかに巫歌の相を見ることが出來るのである。人に向ってはおのれの至情を歌に訴えて相手の心を動かし、神に對しては至誠敬愼をもってうたう歌の德によって、鬼神を感動させようとしたのである。

だから『詩經』の詩は、或は歌によって愛する者の心を引きよせ、或は宴に集った一族の心を親睦させ、或はおのれの哀しい境遇を歌にうたって、この歌が上に聞えて、民びとの悲慘を救いたまえと嘆き訴え、或は虐政の實情を歌にうたって王の反省を切望し、或は神が歌のことばをきいて、子孫に永い平和と限りない幸福とを與えんことを乞う。すべておのれの思を歌にうたって、直接に相手の心を感動させようとする、切實な聲であったのである。

さて『詩經』に收められている詩は、詳しくいえば國風百六十篇、小雅八十篇（その中六篇は

篇名ばかりで歌詞が缺けている)、大雅三十一篇、頌四十篇、合せて三百十一篇(實は三百五篇)である。國風は各國の民謠、雅は朝廷の音樂、頌は宗廟祭祀の樂歌ということになる。

これらの詩の表現法に關して、三つの方法があることが古來注意されている。一つは賦と名づけるもの、すなわち直敍法。一つは比と名づけるもの、すなわち比喩の法。この二つについてはあまり問題がないが、今一つ興と呼ばれる方法がある。興という言葉はもともと起すという意味で、詩の興とは「まずはじめに或ることを言って、それによって主題を引き起す方法」である。たとえば河の洲に雌雄の鳥が睦じく遊んでいることを詠って、すぐれた青年と美しい乙女とがまことに似合いの夫婦であることを言いおこす。比喩ではない一つの發想法である。そしてこの形が三百篇の詩の中のおよそ半ばをしめている。

つまり詩というものは心が何かに誘われて動き、それが言葉に現れ、ただ言葉に現しただけでは足らず、さらにこれを歌うものであり、この外界の事物の印象につれて歡びや悲しみが胸に起る、それがそのまま詩に現れたのが興という形であろう。これが本來興の意義であるが、しかしそれがいつのまにか類型的になり、極めて形式的なものになってくる。たとえば尊敬すべき人を讃えるのには、必ずまず山に見事な樹木が茂っていることから詠い出す。本來は山の草木の繁茂に素晴らしい生命力を感じ、それに結びついて好もしい男性を讃えることばが引き出されるのであろうが、やがてこれが一つの型となると、儀禮的に人を讃えるのにもきっとこ

の形を用いるようになる。野に出て草を摘みながら人を戀してうたう歌は、いつかまた一つの型となって、離れている人を、故郷を、偲んでうたう歌の冒頭には、必ず草摘みのことばが附け加わる。まずそういう文句から始めねば主題が言い興されないかのようである。或は男女がたがいに唄い合うときなど、まずきまり文句の歌い出しからはじめて、それからその場その場にふさわしいことばをつづける方が容易でもあったのだろう。

詩の興には山川草木鳥獸蟲魚などすべて身のまわりの物事が現れる。ただ今日から見て、その興のことばと、詩の主題とのつながりがはっきりせぬものが多く、そのために生れる詩の牽強附會な解釋が從來少くない。思うにそれらの興は古代の人々にとっては、みな日常極めて身近い、彼らの生活に密接な關係をもつものが、無雜作にはいって來ているに違いない。もともと『詩經』の詩には、風花雪月、草木鳥獸そのものを對象として詠ったものは一つもない。それらはみな人事を言いおこすためにだけ引かれているのである。

古來風・賦・比・興・雅・頌を並べて、詩の六義という。實はここにのべたようにその中、風・雅・頌は詩の體の區別であり、賦・比・興は詩の表現法の相違なのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

國風

さて風は十五國風に分たれる。周南・召南はいわゆる二南で、周朝の初めに周公・召公が封ぜられた、今日陝西省の中部以南の地から採られたものといい、その中に漢（漢水）だの江（長江）だのいう名前が出てくるのを見ると、いかにも周の都の南方の歌謠がはいっているかと思われる。いずれ周の音樂師が南方一帶の歌謠を採ってきて、それを朝廷で奏したのだろう。周の朝廷の音樂であるところの雅頌に對して、これらの一種民間調をなす樂曲を總じて「南」と稱したものといわれる。（だから周の南方の歌謠ばかりでなく、周が洛邑に遷った後に、平王の孫女が結婚したとき、それを祝った東周の民間の歌が、朝廷の音樂師に採り上げられて、これもやはり南の中に加えられた。）

つぎに邶・鄘・衞の三國風は實はみな衞國（今の河南省黃河以北地方）の歌だ。衞の詩の數が多いので三つの部分に分け、古い地名を用いてそれぞれに名付けたのであろう。

王風は東周の王都である河南洛邑を中心とする地方の歌。以下鄭（河南新鄭地方）、齊（山東）、

魏、唐（山西）、秦（西方の蠻族がもとの西周の土地に入って諸侯となった國、陝西省）、陳（河南陳州）、檜（河南密縣、鄭に合併された國）、曹（河南曹州）の各國風及び豳風がある。豳は陝西邠州で、周の先祖の公劉以下十代に亙って住んだ所といわれ、豳風「七月」の詩は、從って周の先祖の王業の艱難を、聖人周公が詠ったものだといわれているが、それは全くこじつけで、實はその詩は農村一年の行事を、暦のようにうたったものである。農を重んずる心から、それをことさら周公にかこつけたものだろう。なぜ周公にかこつけたかといえば、周公は魯の先祖であるから。そして『詩經』というものは、魯の國であつめられたものと私は考えるのだ。ではなぜ豳風と名付けたか。それは或は豳籥という笛に合せてうたったからとも考えられる。豳籥というのはもとは豳地の竹で作った笛ともいい、ともかく古くから農村に傳わる一種の聲調であったらしい。そして今『詩經』の豳風には七篇の詩がのせられているが、その中「七月」の詩だけが本來の豳風で、あとは恐らく魯國（今の山東省地方）に傳わる古い歌で、魯の先祖周公に何か關係があるとされるものを附け加えたものらしい。

魯の國には早くから周の雅・頌・二南が傳わり、そこへ近くの衛國の詩が澤山流れて來て（衛は後にも流行歌の本場であった）魯の國で知られ、その後また王風以下各國の歌が集って來たのだろう。というのは、魯の國では、或る時期に於て大いに國威を張ろうとして、周の雅樂に倣って「魯頌」を製作したことがあるし、また同じ春秋時代の或る時期に、諸侯の使節が

他の國を訪問した際に、詩の一節をとなえて、それで自分の意志を相手に傳えるという外交辭令が盛に行われているが、その習わしをはやらせたのは、實に晉國と魯國の人々のしごとであり、ことに魯の叔孫穆子が立役者であったことなど、當然魯國に於ける周詩の研究、他國の詩の蒐集と合せ考えられよう。叔孫穆子が政治的に活躍していた頃、南の吳の國から、季札という人が魯にきて、周の音樂を聞かせてもらった話（B.C.544）が『左傳』にのっている。魯には周の音樂師もかなりきていたらしい。そういう風氣の中で、周の雅・頌・二南、それに北方の國々の歌があつめられたのは不思議でないと思う。孔子は「詩三百」といっているから、孔子（B.C.551—479）の頃にはもはや大體いまの『詩經』のままの詩が魯國に集っていたと見て差支えないように思われる。

關雎（周南）

一　關々雎鳩　　關々たる雎鳩は
　　在河之洲　　河の洲に在り
　　窈窕淑女　　窈窕たる淑女は
　　君子好逑　　君子の好逑

二

參差荇菜
左右流之
窈窕淑女
寤寐求之

三

求之不得
寤寐思服
悠哉悠哉
輾轉反側

四

參差荇菜
左右采之
窈窕淑女
琴瑟友之

五

參差荇菜
左右芼之
窈窕淑女
鐘鼓樂之

參差たる荇菜は
左右に流る
窈窕たる淑女は
寤寐に求む
求めて得ざれば
寤寐に思服ふ
悠なる哉、悠なる哉
輾轉反側す
參差たる荇菜は
左右に采る
窈窕たる淑女は
琴瑟もて友しまむ
參差たる荇菜は
左右に芼ぶ
窈窕たる淑女は
鐘鼓もて樂しまむ

國風周南のはじめの名高い詩である。關々は鳥の鳴く聲。睦じく連れ鳴く雎鳩に、君子と淑女がよき配偶であることを詠いおこし、左右の水邊に生い出ずる水草を摘み取ることをもって、よき乙女をえらび求めることを言いおこす。これが「興」の體である。興は眼に見、手に觸れることに卽して、おのが思いを言いおこすものである。窈窕はたおやかな形容。參差は長短不揃いの形。荇菜は水草。和訓にあさざという。左右流之の流は何かの借り字として從來いろいろの説があるが、字のままに讀んで、荇菜が水のまにまに流れ漂っているさまと見たい。この場合流之の之は語助にすぎぬ。寤寐はさめてもねても。悠哉悠哉とは思いはてなき心持ち。首章に窈窕たる淑女が君子の好き伴であることをいい、二章三章はすべてよき乙女を求め焦れて、夜もすがらねがえり打って思いなやむこと。四章五章は一たびそのひとを得ては、琴瑟鐘鼓の音樂をもってよろこびいつくしもうという。

この詩と非常によく似たものに、陳風澤陂（一〇七ページ）の詩がある。澤陂も同じく美しいひとに戀い焦れて、「寤寐爲すことなく、」「輾轉枕に伏し、」滂沱々々と涙を流すという、いちずな戀の歌である。しかしながらこの關雎の詩は、夜もねむれずに思いなやむ戀心を率直に訴えつつ、しかもその熱い情を胸にたたえて、美しい敬愛の心にまで高めたものとして、孔子もあるときこの詩を批評して、「關雎は樂しめども淫せず、哀しめども傷らず」といった。樂しめ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton